

‘お κόσμος, ἀλλοίωσις. ο βίος, ὑπόληψις.’

20号 1990.11.22

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: ANTHRAX 1990.9.10 五反田簡易保険会館

アンスラックスの音楽自体は私にはすこし退屈。前回見たときも音楽は印象に残らず、リズムギターのスコット・イアンのクールな姿に不思議な目だけに強くひきつけられた。だから今回もききにいった。やっぱりスコット・イアンだけにしか目がいかなかった。スコット・イアンの歌とギター、とても印象的だった。なんか、すべてのふんではいるようなギターのひびき。スコット・イアンってギターで自己を表現してるって感じじゃない。誰かがスコット・イアンに「はいっ」って言ってギターをわたして、それを受けて「こういうのって楽しい？」って感じで弾いているみたい。だからきいている人たちが楽しんでいっているのかわかると、あんなふうにならざるを得ない。スコット・イアンはこの世の中の苦しいこと、悲しいことも自ら体験しなくてもそれを歌えることのできる人だと思う。歌っているから人を楽しませてくれるのだ、あんなふうには。

LIVE: LIP CREAM 1990.8.27, 9.15 新宿アンティック

いつもぎゅうぎゅう話めのうしろの方で、ほとんどステージを見ることのできないLIP CREAM。見えなくてもそのすばらしさはちゃんとどいてくるけど、前の方で見てみたい。8月27日のときはドラムがとりわけすごかった。メロディアスともいえるほどで音楽の中心になっていた。9月15日のときはギターがすばらしくなりひびいて、ヴォーカルがそれののっかって、私はLIP CREAMの音楽にまるごとつかまれて透明人間のようになった。

ライブのあと、10月20日のLIP CREAMの前売券をアンティックの係の人から買おうとしたら「やるかどうかはぼろぼろしていない」とのこと。何日かしてアンティックにいったら確かめたら、10月20日にやらないだけじゃなくて「もうライブやらないと思いますよ」と店の人にいわれた。えー！

LIVE: 虫と虫葉 1990.9.9 新宿JAM, 9.23 本八幡 11.15 新宿JAM

8月19日 炎天下の原宿の歩行者天国で、別にこれといってひかれるバンドがないので、THE CANDYのやるところにすわっていた。THE CANDYの前にやったバンド、歌詞は全くききとれないんだけどとても鬼気迫るひきつけられ、さいごまできいた。全身全霊が音楽にのっかった。それが虫と虫葉というバンドで、9月9日にJAMでやるとのことなので、チケットを買った。9月9日新宿JAM、9月23日本八幡14、11月15日新宿JAMとライブを追いかけてきた。

虫と虫葉は不思議。なにもかわったところがあるわけじゃないのにものすごくひきつけられる。メロディもリズムもききとれた感じだし、歌詞だってほとんどききとれないのに、ロックンロールの骨格だけともいえるほどにみごとなロックンロールだけをやっていっているんだけど、やっている4人が、みんなそのロックンロールの中で100%生ききっているんじゃないかと思う。11月15日のJAMはとりわけパワフルで、観客に充ちていて……。12月8日下北沢屋根裏で、次のライブをやるときいてザンネン！と思った。シオンのライブと重なってしまったのだ。

LIVE: ジャンキー・モンキー 1990.8.21 吉祥寺漫茶屋 9.7 新宿JAM 9.15 新宿 ロフト

ジャンキー・モンキーの歌から強く感じとれるものは「恨」と「怒」。それは私が自分の心の中の子宮で育てたくないとおかっている胎児。ジャンキー・モンキーのヴォーカルの人は、その胎児を立派に育て、それをステージで産みおとしていく。「恨」と「怒」に美を感じとれる人もいるかもしれない、と思わせるものがある。

SCOTT



SCOTT



SCOTT



SCOTT



SCOTT



SCOTT



SCOTT



SCOTT

LIVE: ティラ/ザウルス 1990.10.7 市川CLUB GIO 10.13 渋谷ラ・ママ 10.17 大宮711-7 11.9 渋谷ラ・ママ

10月7日市川CLUB GIO
はじまったとたんには臓が冷えた。ギターの音がきこえない！冷えた心できいているせいかヴォーカルから歌のじかひ変わってこない。キーボードがギンギンしてジャマなくらい。「なにこれ？」と思って見たら、いつもとちがう人がキーボードを弾いていた。コーラスの人もいない。キーボードがギンギンしているからギターがきこえないのかどうかはわからないけど……。からだかただグレンしているだけのようなギター。見ているのさえずらかった。なんだったんだろう、あれ？

10月13日 渋谷ラ・ママ
全体に見切り発車したような演奏。あせている感じ。後半くらいからベースだけはきいていられるようになったけど、あとは騒音のつまったバケツをひっくり返したように、音がそこらに散らばっているだけ。ギターの音もキーンとしていて拒絶反応が強くなる。ヴォーカルもぜんぜん。全然ティラ/ザウルスの世界をつくり出せていない。だから私も生身の人間として目に見えるものしか見えなかったし、耳にきこえるものしかきこえなかった。でも、それでもいいと思っていた。こんなことでライブの途中で帰ってしまうような、そんなふうにはティラ/ザウルスを自分の中に棲まわせているんじゃないらしい。それがよかった。

SCOTT

10月17日 大宮711-7
はじまりの音楽なしで、すぐに「COCK SUCKER BLUES」別になんという曲もない。次の曲になってもじははやらない。だけど曲目「まるで恋にひうはわれたように……」ではじまる歌になったら、胸がズーンと反応。気がついたらキーボードの人はいなくて、コーラスの人が2人ステージにいた。ギター、よかった！いわれている感じで、それが素晴らしい感じでもあった。歌、そんなによくなかったけど、それでもティラ/ザウルスの世界をじゅうぶん感じさせてくれた。緑色の新しいコスチューム、すてきだった。

アンコールがはじまるまで、柱にもたれていたら臓がドッキンドッキンしているのがきこえてきた。胸に手をあてたらドッキンドッキンしていた。

きみには、次のことしか言えない。
ボッカチョが『デカメロン』の中で言っているように、
「やった後で後悔するほうが、やらないことと後悔するよりもずっとましだ」という一句だ。
今日きみが享受している、恋することによって得る喜びは、明日になればもう受けられないものなのだよ。
それを受けているきみは、わたしにすればイギリスの王よりもうらやましい。塩野七生「マキャベリ 語録」より

11月9日 渋谷ラ・ママ
ステージがはじまるまで、映画「ロッキー・ホーショウ」がモニターにかかっていた。うれしかった。

全体になんとなく私の方の焦点が（目にも）定まらない感じだったけど「まるで恋にひうはわれたように……」ではじまる歌とそのあとの何曲か、それとアンコールはよかった。アンコールのときぬいじゃったギターの音をききながらステージを見ていると「私は、現在死んでいる」という思いが強くおこってきた。自分を死体みたいに感じていた。何かそう感じさせるんだろう？深く感動しているのに、どうして「死んでいる」と感じるんだろう。生ききっている瞬間間というのには死に近いのかな？

このあいだ全裸にいったときに「(この世での)生まれかわり、死にかわり」という話もきいたけど、そういうことなのか？ティラ/ザウルスの音楽には私をこういうところまで導く力がある。次のライブ、12月ラ・ママ

LIVE: ELECTRIC GANG 1990.10.13 渋谷ラ・ママ

ティラ/ザウルスをききにいったときに前にやったバンド、大阪から来たということしかわからない。3人編成でドラムの人が歌う、歌詞は全部英語。それが実に凄まじくて、ちゃんとききとれる。とんとんひきつけられていた。短いステージだったけどじゅうぶんだんのうしろ。アンケートも裏までひらき書いた。その場でCDを買った。CDも!!!

CD: ELECTRIC GANG (トランジスターレコード)



↑CDの歌詞カードの写真から「SWEET LITTLE SISTER」と「WORKING MAN」はサイコーのR&R!!!